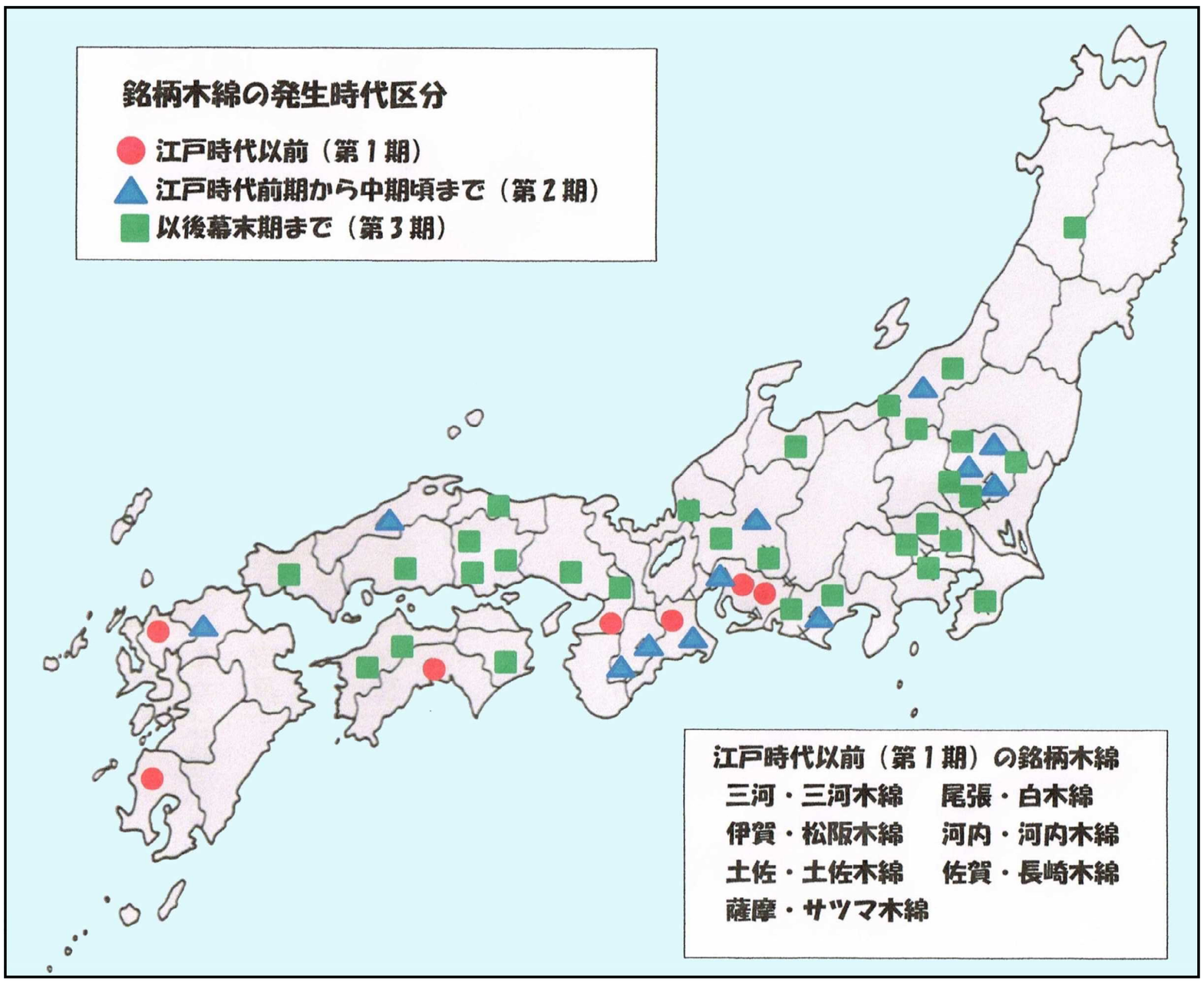
銘柄木綿の発生と生産地の拡大

気候が温暖で水はけが良く、綿の栽培に適した三河や尾張及び畿内・九州地方などでは、他の地域に先駆けて16世紀後半に銘柄木綿がつくられるようになった。

江戸時代になると寒冷地を除き綿を栽培する地域が増加し、それとともに銘柄木綿の産地が拡大していった。

一方、江戸の城下町が出来た頃から三河の商人は江戸で伊勢・尾張・三河の特産物を販売していた。その後、伊勢・尾張の商人が江戸の地に集まるようになり、中でも伊勢の商人は特に品質が良いとされた松阪木綿などを扱ったことから越後屋（後の三越）のような豪商も誕生した。



各種銘柄木綿の発生時期と地域分布

出典:武部善人著『綿と木綿の歴史』

同書の「各種銘柄木綿の発生と地域分布の事例（図24)」を筆者が加筆修正

また、大消費地であった江戸では多くの木綿の需要があり，伊勢や三河地方一帯では、これに応えるように木綿の生産が拡大していった。

越後屋

延宝元（1673）年、松阪商人の三井高利が江戸本町に創設。屋号は、武士であった高利の祖父・高安の官位「越後守」に由来。店章は井桁に三の字であった。

明治 37(1904）年に屋号を三井の三と越後屋の越から三越に変更。この時に店章を〇に越の字に変更した。

松阪木綿などの商いで豪商と呼ばれた 越後屋（後の三越）

出典：『大江戸歴史散歩』